

モンゴルの遊牧的牧畜～動く生業様式への支援

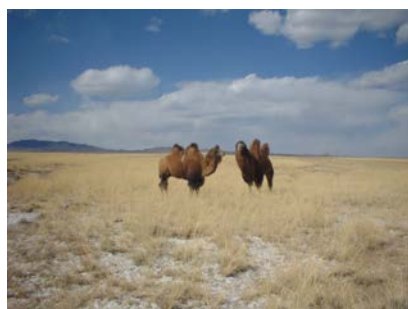
2003 年 4 月より開発調査の一員としてモンゴルのゴビ地域へでかけている。社会変革や自然災害の波に揺れる当該地域の牧畜業体制を見直し、その改善ならびに支援を多角的に検討する業務であり、なにより筆者にとってはシリアにおけるアラブ系牧畜民バグラー族とのつきあいにつづいてユーラシア大陸の牧畜民にふれる格好の機会となった。

モンゴルは 1990 年代にはいり社会主義の計画経済体制が崩壊した。それにもないネグデルと呼ばれる集団農場が解体されて牧畜民による家畜の個人所有が認められた。市場経済体制下で家畜頭数は急激な増加を示し、失業率の増大に呼応するかたちで牧畜民世帯数も上昇してきた。他方、ネグデル・システムのなかで維持・管理されてきた井戸をはじめとするおおくの給水施設がこうした混乱期に消失した。さらに、社会主義時代に手厚く実施されていた牧畜民に対する支援サービスもなくなり牧畜民の生活はおおきくさまがわりしつつある。

さて、上述の政治・経済体制の移行にともなう牧畜民社会の激動はもとよりモンゴルではさまざまな「動き」を感得することができる。まず降水量の年次間の振幅が大きく、草の生産量も降水量の多寡に作用されたえず変動している。また遊牧的牧畜は生業類型としてとらえれば、定住的農耕とおおきく異なり、移動を基本としており耕作をおこなわず固定家屋を必要としない。しかし、「動く」牧畜形態である遊牧的牧畜は近代国家による定住化政策等で徐々にその伝統的な姿を消してきた。こうしたなかモンゴルにおいて、自然条件の特異性があったとはいえ、遊牧的牧畜が旧ソ連の社会主義の影響による変容をこうむりつつ現在にいたるまで連続とつづけられてきたことは驚かざるをえない。

降水量の寡少と変動という乾燥地特性にくわえて、厳冬期の寒冷というきびしい気象条件のなかでモンゴルの牧畜は営まれている。気象条件のきびしさは、草原の植物生産の低生産性と不安定性をうみだしている。ましてやゴビのような土地では、農耕を持続的かつ安定的に営むことは可能性が皆無ではないにせよ、ほとんど無謀な企てであろう。牧畜民は家畜群とともにみずから動くことで草原の低生産性ないし不安定性をたくみにおぎない克服してきた。季節的・地域的に偏在するけっして豊かとは言えない草資源を有効に獲得するため、ゴビでは動くことが決定的に重要であるとおもわれる。ぎやくに、牧畜民の動きがあるからこそ稀少な草資源が豊かに維持されてきたとも言うるであろうか。顔は日本人と似ていても、必ずしも日本が蓄積してきた農耕の技術や思考方式が直接通用しない「動く」相手と向き合いながら、市場経済化の渦のなかでのモンゴルの遊牧的牧畜の将来像を模索している。

(ドルノゴビ県サインシャンドにて：古賀)



ゴビのフタコブラクダ



残雪の春営地



疾走するアジアノロバの群れ

「人作り・人材育成」－研修業務への我々の取り組み－

第3回：研修効果を倍増させるフォローアップ活動

国際耕種は JICA 筑波国際センターからの委託業務としてタジキスタンや南部アフリカ諸国対象の野菜栽培分野での研修活動を、この4年ほど継続して実施している。同センターでは栽培分野以外にも、農業機械、灌漑排水などの研修が行われており、それぞれの分野における自国での農業の発展に貢献することを目指して、多くの研修員がこの研修に参加している。こうした研修活動の最終的な目的は、日本で学んだ技術を活かし、自国の農民達の生計向上に資する事であり、ひいては当該国あるいは地域の農業発展に貢献することである。

上述のように国際耕種はタジキスタン国別特設野菜栽培コースを数年に渡って実施してきたが、昨年の研修を最後に終了した。この研修に関して、帰国研修員のその後の活動状況や今後の研修ニーズの把握などを調査することを目的として、フォローアップ調査が実施され、我が社のスタッフもこの調査に参加する機会を得た。研修員の多くは研究者、普及員、生産農家など農業に従事する各分野から選ばれており、帰国後も日本の研修で得た知識や技術を有意義に活用していた。パレイシヨ種芋の量を5ton/haから3ton/haに減量、パレイシヨの芽かきの実施、ポット苗の生産、今まで捨てていたわらを使つての堆肥の製造など研修を通して得られた技術を自分たちなりに工夫し応用がなされている。また、研修で入手した資料やビデオで接ぎ木などの授業を行っているなど、帰国研修員の努力には敬服するものがあった。しかし、一方で様々な課題も見出されている。例えば、日本から持ち帰った器具がうまく利用出来ない。あるいは、現地では資機材の入手が困難で、簡単な資機材も得られないため、研修で得た技術を応用出来ない。配布資料の多くが英語のため、研修員の力では十分な翻訳が出来ず、うまく活用できない。さらに、野菜栽培以外の果樹栽培や普及分野などでも問題を抱えている場合もある。

国際協力の中での研修事業の重要性は「人作り・人材育成」という意味で、今後ともその重要性が深まることは間違いない。また、研修自体が「日本の良き理解者」を作ることにつながる点からも大きな意義がある。そのような中で各開発途上国の事情に配慮しながら、研修員の活動を通して当該国に対する技術貢献を行っていくことは重要である。さらに、研修員は各国の代表として選ばれた人材であるため、彼等が自国の農業開発の中心的存在であるとの意識を持てるように、研修する側から強く働きかけることも重要であろう。

帰国研修員はそれぞれに問題や課題を抱えながら、地域の農業発展に貢献すべく頑張っている。今回のフォローアップ調査を通して、彼等の帰国後の問題や課題に何らかの形で答えていく事の重要性を強く感じた。つまり、日本で受けた研修の成果を、各研修員達が今後の日常業務の中で効果的に活用していくために、研修後の研修員支援に関して本体の研修部分と有機的に関連付けて実施出来るような仕組みや実施体制作りが必要ではないだろうか。例えば、優秀なアクションプランに対して実施のための補助が考慮されると、研修員にとっては大きな励みになる。また、草の根技術協力事業との連携もちょっとした工夫で実現可能と思われる。帰国後の悩み、課題を研修にフィードバックして新たな研修課題に盛り込むことは新規研修員に貴重な情報・技術を提供できる。国際耕種でも、有望な研修員に対しては独自に展開している草の根型協力活動を通じた支援も考えている。そのためにも、帰国した研修員に対して情報を流し続け、彼等からの働きかけに対しては意見交換や技術支援をするように努力している。こうした肌理細かなフォローアップ活動によって、国内における研修事業の効果をよ大きくすることができるものと信じている。



帰国研修員への聞き取り



日本から持ち帰った農業資材

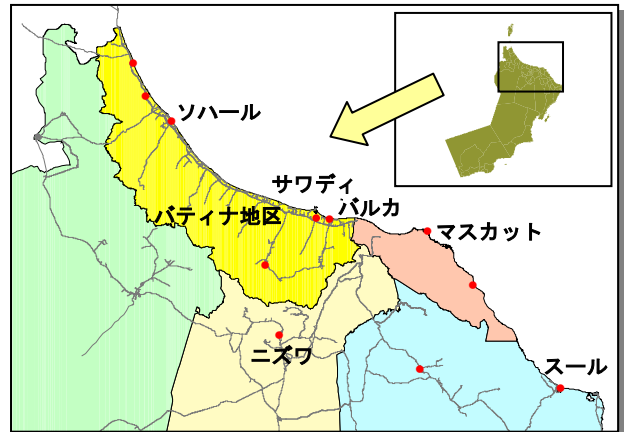


研修員指導農地（小枝マルチ）

マングローブ生態系に学ぶ

第3回：オマーン国における専門家派遣業務

我が社ではオマーン国における入り江の植生復元のためのマングローブ植林を目的として、2000年4月から個別派遣専門家を地方自治環境水資源省に派遣している。これに先だて、同省ではバティナコースト沿岸のバルカでヒルギダマシの移植を行っているが（1997年）、移植後直ぐに大潮と重なった嵐により活着以前にながされてしまい、結果的には失敗したという経緯がある。一方、国の保全・開発計画でもマングローブに対して、どのような取り組みをするのか、その位置づけはどのようなになっているのか、具体的指針は無かった。そこで、着任当初、主要なマングローブ植生及び入り江の実地踏査を行って現況把握に努め、そこから感じた事をレポートにし、それを基にオマーン側との協議を行った。

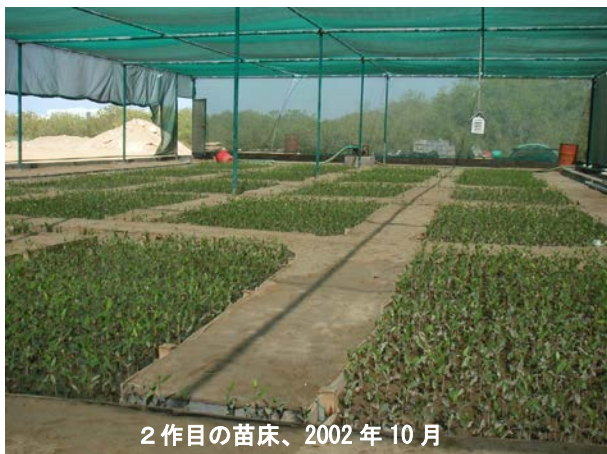


要請されていた、「適切な場所に苗床を建設し、育苗し、適切な場所に移植する」という業務も、可能ならば出来るだけ多くの入り江をヒルギダマシによって緑化したい、というオマーン側の極めて漠然とした意向によるものであることが判った。総論は総論として押さえてあっても、各論となると具体的な提案、方策が一切無い状態であった。そんな中、2000年8月にはポンプ灌漑式苗床を完成させて苗木生産を開始した。

しかし、マングローブには環境にとって正の機能（水棲生物の涵養、生物多様性の保全）のみならず、人の生活にとって負の要素（蚊の発生源、底泥の悪臭等）もあるわけで、所構わず植林・緑化すれば良いという物ではない。なにか基本計画といったものが不可欠であると感じていた。植林するに際し、一番心を砕かねばならない事は、近隣に居住する地域住民の素朴な問いに如何に答えるかということである。何故ここに木を植えるの？植えると何か良い事があるの？このような問いに答えていくことは、とりもなおさず環境教育・啓蒙そのものである。時間も手間もかかるのが教育であることは、日本でもオマーンでも同じである。

そこで、サワディビーチでの最初の植林から、サワディの集落から労働力を調達した。自分たちで植えた木々を自分たちで壊すことは恐らくしないだろう、と期待して。翌年も同じ人達を集めた。最初の年には我々の回答にピンと来なかった人達が、2年目には「この頃木が大きくなってきて、鳥や魚が増えてきたような気がしないでもない」という言葉を口にしたとき、労働力どころかおおざっぱな環境調査員にもなって貰えると確信した。おまけに当初、現地業務費で賄っていた臨時雇用費も、3年目からは環境省が手当するまでになってきている。競争入札で会社に任せるより、地元に出向いて人集めしたほうが経費的にも安くつき、仕事も覚えて貰えることが役所にも判ったからであろう。

これまでに判った事は、地元の間と良い関係を築き、労賃による収入であれ、魚が増えた事であれ、彼等にとって何らかのプラスになることに彼等自身が気付き理解さえすれば、あとは彼等がケアしていく（行政サイドからのケアも不可欠だが）、ということである。このように官民一体となった動きがとれて初めて、持続可能な活動になり得ることがわかってきた。



2 作目の苗床、2002 年 10 月



2 回目の移植、2003 年 2 月、サワディ

最近、国立大学の独立行政法人化も影響していると思われるが、官学・官民と言った各分野での協同研究が新聞などに紹介されている。しかし、その多くは研究協力的色彩が強い。大学の大きな柱に研究と教育がある。最近の傾向として多くの企業が実践即応型の人材を求めており、大学が社会に貢献する上でもこのような要請に答えていく義務もあるのではなからうか。AAI News 第 39 号でも紹介したように、国際耕種では長期的な後継者育成、人材発掘をテーマに大学との交流に積極的に取り組んでおり、これまで関係してきた大学に交流機会の拡大を訴え続けてきた。静岡大学の学生を対象にしたセミナーもその一環である。同大学には「環境修復学特論」というテーマで、農学研究科人間環境科学の専攻生を対象とした講義を依頼された。講義内容は「乾燥地・半乾燥地の環境の特徴、砂漠化の現状、砂漠化の自然・社会的要因、砂漠化防止対策、農業と環境の関わり等」であり、国際耕種の過去の経験を学生に伝える意味でも良い機会であった。

講義では国際耕種のスタッフが今回の特論を担当するに至った経緯、我々の過去から現在に至る活動、及び乾燥・半乾燥地域の環境と砂漠化の現状に関する一般的な紹介を行ったが、ここで、意識したことは教科書的な説明ではなく乾燥地域に長期で滞在して体感したことを中心説明したこと、また学生の修論のテーマとしても考えられそうな課題の紹介にも努めたことである。砂漠化の現状や防止対策の紹介に当たっては、現在抱えている課題や将来的な展望も含めて、資源管理という考え方の重要性を強調した。また、乾燥地域における農業開発の現状においては、途上国援助におけるソフト化の流れや NGO、自治体、大学とのパートナー事業の重要性にも触れた。さらに、乾燥地開発における持続性という視点の重要性や「21 世紀は水の世紀」といわれる中での節水の重要性についても言及した。

午後には個別プロジェクトの事例紹介を行った。プロジェクトに参加した本人が紹介を行い、臨場感あふれる講義となるように努めた。具体的には砂漠化の大きな原因としての過放牧に着目し、オマーン国ドファール地域及びシリア国アブデルアジズ山麓地域における資源管理の実態について紹介した。また、アラブ首長国連邦における植林活動の現況、植林技術の問題点や将来展望にも触れた。さらに、ケニア国及びパキスタン国での事例紹介では、灌漑開発における環境配慮の重要性を説明し、開発が環境に及ぼす影響と地域住民の暮らし、流域全体を包括的に考えることの重要性、住民参加型活動の重要性等を強調した。

講義終了後の質疑応答では、技術協力におけるコンサルタントの役割等も話題になり、その中で我々コンサルタントが取り組むプロジェクトの業務、JICA との関係、取り組みかたなどを率直に紹介した。学生達には講義の感想や質問を報告書にまとめてもらい、質問には出来る限りの対応を行った。こうした活動を通して、学生達にも国際協力について考える場を提供し、そこで得られた知見を彼等の研究テーマに活かしてもらえれば我々も望外の喜びであり、逆に我々も現在の学生が海外協力にどのような考え方をもち、それに対し我々が学生に何を提供していかなければいけないか勉強する格好の機会となった。国際協力事業への大学の参画が注目されている今、こうした我々の活動を通して多くの学生に国際協力の実態を知ってもらい、将来的にはこうした学生達が国際協力活動に携わるきっかけになることを望んで、今後も大学との交流活動に力を注ぎようと考えている。

農学研究科 人間環境科学 環境修復学特論レジメ

2003 年 11 月 11 日

1. 参加者自己紹介 (10:30~11:00)
2. 乾燥・半乾燥地域の環境と砂漠化の現状 (11:00~12:00)
 - 乾燥地・半乾燥地の環境の特徴
 - 砂漠化の現状、防止対策、課題及び展望
 - 乾燥地・半乾燥地における農業開発の現状
3. 事例紹介 (13:30~15:30)
 - 乾燥地域における資源管理
(オマーン国ドファール地域での事例)
 - シリア国における牧民による資源管理
 - アラブ首長国連邦における植林活動
 - 灌漑開発における環境配慮の重要性
(ケニア国、パキスタン国での事例)
4. 質疑応答 (15:30~16:00)